

地球環境の回復力の維持・向上を目指し、 事業活動と社会貢献活動の両面で生物多様性保全に取り組んでいきます。

リコーグループは、1992年に制定した環境綱領*1に基づき、環境保全活動と経営活動を同軸であると捉え、地球市民の使命として、自らの責任で地球環境保全に取り組んでいます。地球環境を保全するには、環境負荷を削減するだけでなく、地球環境の回復力を維持し、高めていくことも重要です。リコーグループは、私たちの事業活動が生物多様性を基盤とする地球の生態系サービスの提供を受けて成り立っていることを認識し、生物多様性の保全に取り組む方針を掲げました。これまで取り組んできた生態系保全活動、社員による自主的な活動の推進、環を拡げる活動などの「環境社会貢献」やCDM*2における生態系への配慮などに加え、今後は、この方針に基づき、事業活動全般で生物多様性への影響を少なくし、その保全に貢献していきます。

*1:16ページ *2:40ページ

「リコーグループ生物多様性方針」の制定

人間社会は、生態系が提供するサービスに大きく依存する一方で、生態系に対して大きな負荷をかけています。過去50年ほどの間に、生物多様性が著しく失われましたが、生態系サービスの基盤である生物多様性の保全と持続可能な利用を行わなければ、人間社会の存続そのものが危ぶまれます。この認識をもって、リコーグループは、持続可能な地球環境のうえに成り立つ真に豊かな社会の構築を目指し、これまでの地球環境保全活動に生物多様性への取り組みを合わせた具体的な活動を推進・展開するために、2009年3月、「リコーグループ生物多様性方針」を制定しました。



リコーグループ生物多様性方針（全文）

社会は豊かな地球環境によって生まれ、その地球環境を支えている多様な生き物の営みが衰えつつあるという認識のもとに生物多様性方針を掲げる。

基本方針

私たちは生き物の営みによる恩恵を得、生物多様性に影響を与えながら事業活動を行っているという事実を踏まえ、生物多様性への影響を削減するとともに生物多様性保全に貢献する活動を積極的に行う。

- 1. (経営の課題)**
生物多様性保全を企業存続のための重要課題のひとつと捉え、環境経営に組み込む。
- 2. (影響の把握と削減)**
原材料調達を含む事業活動全体における生物多様性への影響の評価、把握、分析、数値目標化を行い、その影響の継続的な削減に努める。
- 3. (進め方)**
生物多様性と、事業の視点により、影響・効果の高い施策から優先して取り組む。
- 4. (技術開発の促進)**
持続可能な社会の実現を目指して、生物資源を利用する技術開発、生態系の仕組みや生物の成り立ちに学び、その知恵をいかした技術開発・生産プロセス革新を推進する。
- 5. (地域との連携)**
世界に残る貴重な生態系と、事業を行う国・地域の生物多様性を保全する活動を、行政機関のみならず、地域住民、NGOなどステークホルダーとともに持続可能な発展の視点をもって推進する。
- 6. (全員参加の活動)**
経営者の率先した行動と全社的な啓発施策により、すべての社員の生物多様性への理解と認識を高め、自主的な保全活動につなげる。
- 7. (環の拡大)**
お客様、仕入先様、他の企業、NGO、国際組織などと連携した活動により、生物多様性についての情報・知見・経験を共有し、生物多様性保全活動の環を拡げる。
- 8. (コミュニケーション)**
自らの活動、成果の具体的な内容を積極的に開示することにより社会の生物多様性保全活動の気運向上に貢献する。

事業活動との関わり

生物多様性保全活動の歩み

《リコー／グローバル》

リコーグループの生物多様性保全のあゆみは1999年にさかのほります。当時、オフィス機器事業で紙を取り扱う企業として、限りある森林資源の保全に取り組むべきであるとの認識のもと、環境NGOや地域住民とのパートナーシップにより世界各地で「森林生態系保全プロジェクト」を開始しました。さらに、同年、社員の自主的な活動を促進するため「環境ボランティアリーダー養成プログラム」を開始。また2008年には、生物多様性の保全を目指した企業が積極的に連携し、行動していくことを目的とした組織「企業と生物多様性イニシアティブ (JBIB)」*1の発足に当たり、発起人企業として参画しました。さらに2010年には、世界の貴重な自然林の保護に配慮した「紙製品の調達に関する環境規定」(2003年制定)を発展させ、紙製品以外の木材原料を対象に含めるとともに適用範囲をグループ全体に拡大した「リコーグループ製品の原材料木材に関する規定」*2を制定しました。

*1 <http://www.jbib.org/> *2: 35 ページ

リコーの森林生態系保全プロジェクトが「DEVNET賞」を受賞

2009年10月23日、リコーの森林生態系保全プロジェクトが、NPO法人日本DEVNET協会の「DEVNET賞」を受賞しました。この賞は発展途上国への貢献などを評価するもので、リコーの1999年から継続している発展途上国での地球環境保全活動が、企業による生物多様性保全の先進的な取り組みとして評価されました。

生物多様性に関するリコーの取り組み

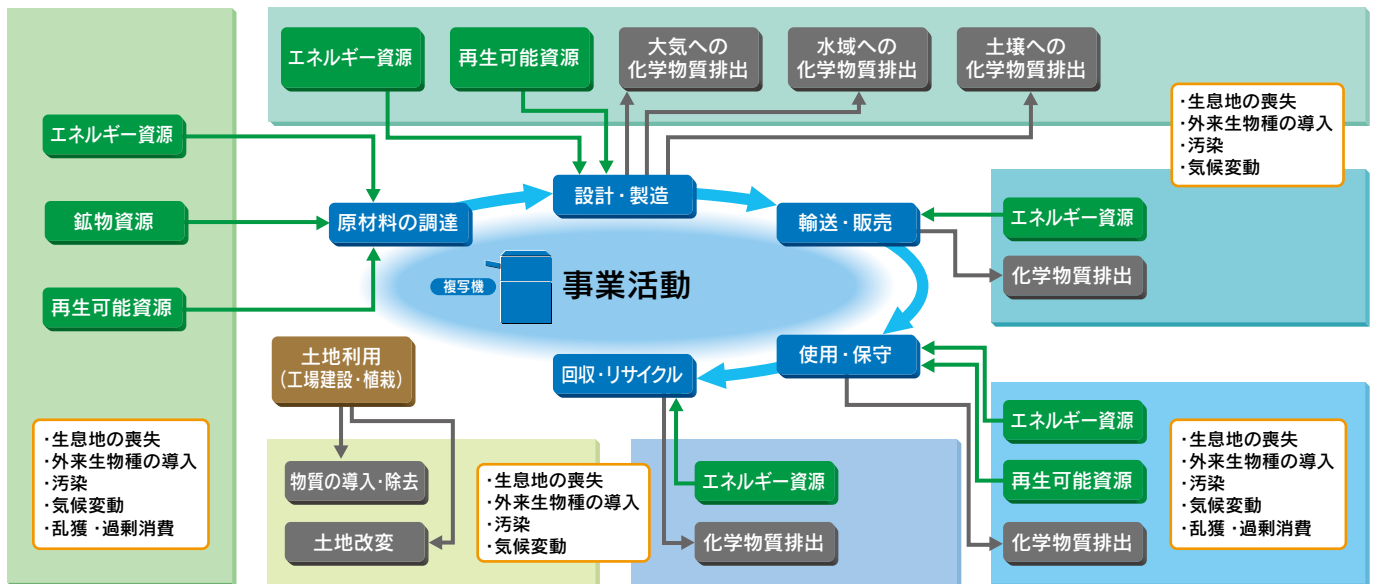
年度	内容
1999	生物多様性保全のための森林生態系保全プロジェクト開始
	環境ボランティアリーダー養成プログラム開始
2002	環境行動計画に「生態系保全活動」を盛り込む
	FSC認証紙導入
	森林生態系保全プロジェクトをテーマに子ども向けWebサイト開始
2003	紙製品の調達に関する環境規定を策定
2004	CDMプロジェクト(生物多様性保全型植林、エクアドル)開始
	エコプロダクツ展で生態系保全活動の展示を開始
2006	生物多様性をテーマとした地球環境月間シンポジウム開始
2007	生物多様性評価指標の検討実施
2008	「企業と生物多様性イニシアティブ (JBIB)」に参画
	「ビジネスと生物多様性に関するイニシアティブ」のリーダーシップ宣言に署名
	生物多様性方針の制定
2009	生物多様性方針に基づく事業領域(紙、事業所土地、教育)での取り組み方の検討を開始
	「リコーグループ製品の原材料木材に関する規定」を制定

事業活動と生物多様性との関係性の把握

《リコーグループ／グローバル》

リコーグループでは、事業活動と生態系との関係性を明確にするためのマップをJBIBのフォーマットにより作成しました。この「企業と生物多様性の関係性マップ」はライフサイクルや土地利用などと生態系との関わりを一覧できます。このマップにより、複写機事業では、紙パルプや金属資源などの原材料の調達、紙資源などで生態系への影響が大きいことがわかりました。今後はこの結果を活用して事業部門と連携し、生態系に配慮した活動につなげていく予定です。

企業と生物多様性の関係性マップ(再生デジタル複合機のイメージ)



人と自然のつながりを社員に啓発

《リコー／日本》

人間社会は、生物多様性から受けているさまざまな恩恵により存続しており、持続可能な社会を実現するためには、一人ひとりが地球環境の回復力の基盤である生物多様性の保全活動に積極的に参加することが重要です。2009年4月には、社員向け環境教育と啓発を目的とする環境Webサイト「ガイアイア」を立ち上げ、その中で生物多様性を大きなテーマのひとつとして取り上げました。また5月には、生物多様性の大切さを理解し、社

員一人ひとりができることを具体的にまとめた「生物多様性行動ハンドブック」を制作しました。これらのツールは、仕事や日常生活で生物多様性に配慮した行動をとれる社員が増えるように、生き物の視点で地球環境の仕組みを学ぶ生物多様性学習会やリコー自然教室などの場で活用されています。2010年3月、「ガイアイア」が、インターネットによる優れた環境情報発信を表彰する「平成21年度 環境goo大賞」(主催:NTTレゾナント株式会社、後援:環境省)において、「環境goo大賞」および「生物多様性部門賞」を受賞しました。

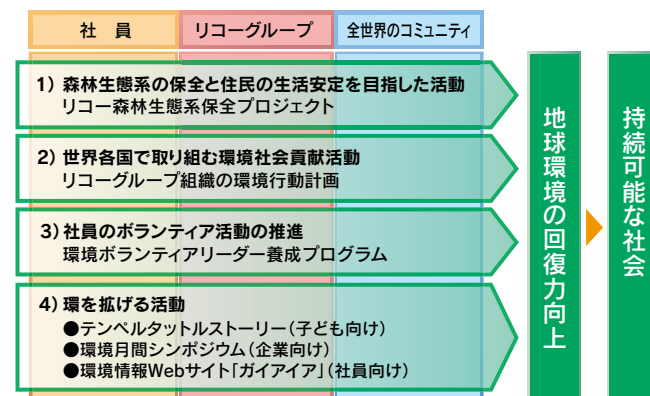
環境社会貢献

リコーグループの環境社会貢献活動

《リコーグループ／グローバル》

リコーグループの環境社会貢献活動は、「森林生態系保全活動」「グループ組織の環境社会貢献活動」「社員のボランティア活動」「環を拡げる活動」の4つの施策から構成され、世界各地の地域コミュニティと一体となって進めています。このうち、世界各地のグループ組織が実践している環境社会貢献活動は、環境行動計画に掲げた生態系保全活動の目標を達成するために、グループ各社で取り組んでいます。

リコーグループの環境社会貢献活動



環境行動計画の推進(国内活動事例)

リコー中部石川支社が環境功労者表彰

《リコー中部石川支社／日本》

リコー中部石川支社は、2010年1月「ふるさと石川環境功労者表彰」で、環境保全貢献企業として表彰されました。これは同社が社員の環境ボランティア活動として2006年から継続して支援している「大呑(おおのみ)グリーンツーリズム・棚田再生活動」などの自然環境保全の功績が認められたものです。約4年間で約数百人の社員とその家族が里山保全や棚田再生活動に参加し、協力しています。リコー中部は、2008年6月には石川県と「里山の利用・保全のための応援活動に関する協定」を結び、石川支社をはじめリコーグループの社員約150名が能登地区で棚田保全や植樹活動を支援しています。



谷本正憲石川県知事(右)とリコー中部石川支社・平間支社長(中央)

リコー千葉ふれあいの森

《リコー販売千葉支社、リコーテクノシステムズ、リコービジネスエキスパート、リコー／日本》

千葉市若葉区の「リコー千葉ふれあいの森」では、リコーグループ社員とその家族などによる里山保全活動が毎月定期的に行われています。2010年2月20日、リコーグループ社員16名とその家族など計22名がコナラの木の移植を行いました。前年に移植した木が育たず、失敗に終わったことを受け、今回は地域の園芸家による根回し(移植の技法)の講習を設け、再挑戦しました。本格的な指導のもと隣地から4本の移植を完了し、その後、成長を見守っています。



根回し講習:土を掘る範囲・根に麻布を巻く方法・道具の使い方を学びました。

環境行動計画の推進（海外活動事例）

ビッグ・グリーン・デー

《リコニューージーランド/ニューージーランド》

販売会社リコニューージーランド (RNZ) がHauraki湾で最も美しい島のひとつMotuihe島で実施する再植林活動は、2009年で6年目を迎えました。5月3日、RNZの社員と家族、ディーラーやお客様など140名のボランティアは、島固有の樹種1,900本を植え、これまでの累計本数は11,000本を上回りました。RNZが行う生態学に基づいた再植林活動は、島の生

物多様性にとって重要なもので、今では一帯が「リコーバレー」の愛称で呼ばれています。今回は、販売スタッフの働きかけもあり、13社からたくさんのお客様に参加いただきました。環境マネジャーのMargie Barriballは、活動を次のように締めくくりました。「お客様と私たちが協力しあってこのような活動ができるのは非常に素晴らしいことです。20年後、私たちはここに育った固有種の林を眺め、自分たちが大切な生態系保全の一部を担ったことを知るでしょう」



山林保全プロジェクトの支援活動

《リコースイス/スイス》

2009年9月、販売会社リコースイスの社員28名がBergwaldprojektの再植林活動に参加しました。Bergwaldprojektとは、自然の生息地の保全を目的としたボランティア活動を行う組織で、高地の山林での伐採防止について長年の経験をもつ森林保護の専門家などを有しており、今回の活動の主催と監督を行いました。当日、Escholzmatt駅に集合した一同は、海拔約1,400mの目的地に到着し、プロジェクトリーダーの挨拶の後、グループに分かれて活動を開始しました。第1グループは若木をシカなどの野生動物から守るため、ワイヤーとフェンスを巡らし、周囲の清掃などを行いました。第2グループは、今後、植林をする際のルートを確認するため、のこぎりやシャベルで山道の舗装を行いました。昼食は、美しい山々を望む広々とした台地で、格別の味を楽しみました。作業は大変な重労働でしたが、参加者一同は大きな充実感で満たされました。



合言葉は「Back to Life - Ricoh reforests!」再植林に参加したリコースイスの社員たち

アースキーパーズプログラムへの支援

《リコオーストラリア/オーストラリア》

販売会社のリコオーストラリア (RAP) は、2003年から、国際環境NPO「The Institute for Earth Education」による「Earthkeepers™ Program」を支援しています。自然林の中で植林などを行う3日間のプログラムで、2009年は8月12～14日、Glengarry Guides Campで行われました。参加者はWaitara地区の小学4年生81名で、RAP社員15名がスタッフとして参加し、Les Richardson社長も子どもたちとともにプログラムを体験しました。子どもたちは、終日自然の中で生態学を学び、環境への理解を深めました。キャンプ終了後も学校や自宅での活動が継続され、一人ひとりが「Earthkeepers」に育成されます。Waitara小学校の教師は、「参加した子どもは環境に対する姿勢が変化し、その影響は生涯を通じてのものになるでしょう。彼らはいまや環境が貴重で、皆が行動を起こす必要があると理解しています」と語りました。



みんな立派なアースキーパーになりました

環境ボランティア活動の推進

《リコーグループ／日本》

地球環境を保全するには、社員一人ひとりが地球市民としての意識をもって、自主的に社内外で活動を実践することが重要です。リコーは1999年6月から、社員を対象とする研修制度「環境ボランティアリーダー養成プログラム」をスタートさせ、2001年度にはリコーグループ社員および退職者も参加可能としました。これまでに、496名の環境ボランティアリーダーを養成し、各リーダーは、それぞれの所属する部署や地域を巻き込んで、環境ボランティア活動を展開しています。彼らの活動は、社員や家族・友人との活動から地域社会へと拡がりを見せています。

環境ボランティアリーダー養成プログラム



TOPIC

リコー自然教室・実践編

「青山通りを生き物の通える道へ」、 青山小学校でピオトープづくりを行いました。

2010年2月6日、リコー自然教室・実践編として、東京・港区立青山小学校にてピオトープづくりを行いました。2009年3月の「リコーグループ生物多様性方針」制定を受け、リコー自然教室はより生きもの視点で生態系を考える内容にプログラムを刷新しましたが、都市部に住む環境ボランティアリーダー達から「都会での活動実施が難しい」などの声が寄せられていました。そこで今回、「都会だからこそできる活動」をテーマに、小学校で子どもたちと一緒にピオトープを造成する新たな研修を行いました。港区立青山小学校は、青山通りが東西に走り、南北に青山墓地・神宮外苑が隣接する場所にあります。当日は、朝9時校門前に環境ボランティアリーダー20名を含むリコーグループ社員と先生方、保護者、地域の皆さんが集合。開会の辞として、リコー社会環境本部環境コミュニケーション推進室・益子室長より、この企画が「青山通りを生き物の通える道へ」をスローガンに独自の生物多様性保全活動に取り組んでいる青山商店会連合会の協力と共催により実現したことに対して、謝意が述べられました。午前中は環境ボランティアリーダー達がピオトープ造成のための土木作業を行うとともに、4年生約30名を対象に、三森典彰さん



(人と自然の研究所)による公開授業「生きものとお話しよう」が、保護者や地域の方々が見守る中、行われました。午後からは授業を終えた児童の有志18名が加わって本格的なピオトープの造成の開始となり、土の踏み固めや水草の植栽を行い、最後に仕上げの水入れをして、ピオトープが完成しました。冬眠中のヒキガエルが活動し始める前に完成させようと、2月の厳しい寒さの中での活動となりましたが、皆の頑張りの甲斐あって、その後ピオトープではヒキガエルの産卵が確認され、3月中旬にはたくさんのおたまじゃくしが泳ぎ始めるなど、小さな生態系は順調な一歩を踏み出しました。

※ ピオトープのその後の様子は、環境Webサイト「ガイアアイア」にて、定点観測日記として公開しています。 <http://www.gaiia.jp/ActivityRupo/>

環境ボランティアリーダーの活動

材木座海岸清掃&サンドクラフト大会

2009年9月21日、鎌倉・材木座海岸でビーチクリーンアップ&サンドクラフト大会が行われました。これは1999年に環境ボランティアリーダー第1期生がグループ社員に呼びかけて始めた活動で、11年目を迎えました。材木座海岸には海水浴シーズンを終えるとさまざまなごみが残されます。これらのごみを収集・分別し、廃棄処分し、清掃後、浜辺の砂を使って砂像(サンドクラフト)を作るイベントを行います。崩れにくい像を作るには、ごみの混じらないきれいな砂が必要なので、参加者はおのずと清掃に力が入ります。初回は約15名で始まったこの活動は、口コミでその楽しさが広まり、現在では100名以上が集まる恒例のイベントとなっています。当日は、リコーグループ社員とその家族、市村自然塾関東*の卒塾生など120名以上が参加。十分な人手により清掃は約1時間で終了し、サンドクラフト大会では、今年もたくさんの力作が並びました。初回以来、協力いただいている鎌倉砂像連盟様の監修により、本格的な砂像作りを楽しみました。

* 市村自然塾関東 <http://www.szj.jp/>



地域の人たちにも広く知られる一大イベントになりました



優勝者には、副賞として市村自然塾関東で採れた新鮮な野菜が贈られました

「ざつきりんセーバー」ツリークライミング体験会

2009年11月15日、リコー環境ボランティアグループ「秦野雑木林を守る会(That's Kirin Saver)」が、神奈川県秦野市郊外の震生湖畔にて70回目となる森林保全活動を行いました。今回は活動開始から10周年の記念イベントとしてツリークライミング体験会を実施しました。リコーグループ社員とその家族や友人など総勢20名が木登りを体験し、地上10mを超える樹上からの眺めを楽しみました。「ざつきりんセーバー」は、秦野地区の環境ボランティアリーダーが声を掛けあって2000年秋に発足した森林保全サークルで、10年間、ほぼ月1回のペースで雑木林の手入れや植生調査などを続けてきました。今回は記念イベントということで初参加の方もおり、まず雑木林を歩きながら活動内容とその意義などを説明しました。参加者からは「ツリークライミングが目当てで参加しましたが、雑木林をきちんと手入れする価値がよくわかりました。今度は環境保全にも参加したい」との感想をいただきました。

※1 That's Kirin Saver
HP http://www7b.biglobe.ne.jp/~thats_kirin_saver/Thats_KIRIN_top.htm
※2 ツリークライミング® ジャパン
HP <http://www.treeclimbingjapan.org/>



ツリークライミング

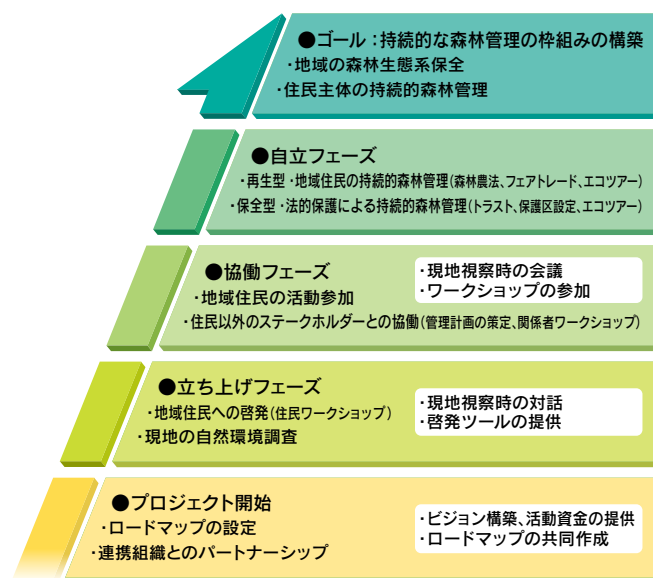
森林生態系保全プロジェクト

《リコー／グローバル》

地球上には、森林、湖沼、珊瑚礁、海洋など、さまざまな生き物の生息地があり、それぞれに特有の生態系が保たれています。生態系が崩壊すれば、人類の生命維持に必要な自然環境も崩壊します。リコーは、生態系の中でも、特に生物多様性が豊かな「森林生態系」に注目して、1999年度から環境NGOや地域とのパートナーシップのもとに「森林生態系保全プロジェクト」を展開しています。これらの活動は単なる植林とは異なり、土地固有の生物種の生息域や住民生活を守ることを主眼とするもので、持続的な森林管理の枠組みの構築を目的に行われています。活動の資金は、継続して社会貢献を行うためにリコーが設けた「社会貢献積立金」から拠出されています。「社会貢献積立金」は、株主総会での承認のもと、毎年の利益から年間配当を差し引いた金額の1%（上限2億円）が積み立てられ、「地球環境保全」「青少年育成」など、グローバルな課題に取り組むために活用されています。

プロジェクトの目標達成のステップ

□ はリコーの関わり



リコーの森林生態系保全プロジェクト(2009年3月末現在)

開始年月	国名	名称／NGOパートナー	活動内容	進捗状況			
				立ち上げ	協働	自立	ゴール
1999年6月	バングラデシュ	さとやまの復元／ポーシュ	里山の復元を行うことで地元住民の生活向上につながることを目指す。植林や育苗の仕事を提供すると共に子供の教育の場として里山を活用する。	→			2007年
2000年2月	スリランカ	世界遺産地域の森林保全と復元／スリランカ野鳥島学グループ	スリランカオナガなど絶滅の危機にある生物が住める森を残すことを目指す。地元住民や行政と協力して活動を行う。	→			2007年
2000年3月	フィリピン	熱帯雨林回復＊／コンサベーション・インターナショナル	フィリピンワシに代表される生物たちのすみかである森を回復することを目指す。地元住民が組合を立上げて行政の支援を得ながら活動する。	→			2010年
2000年10月	マレーシア	熱帯林・オランウータン生息域回復＊／WWF	オランウータンなど絶滅が危惧される生物の生息空間である熱帯の森を拡げることを目指す。森林回復事業を村単位で請負い、収入を増やし生活安定につながる枠組みを築く。	→			
2001年11月	中国(四川省)	温帯林・バンダ生息域回復＊／WWF	バンダを代表とする固有の生物のすみかである森を残して絶滅を防ぐことを目指す。保護区内での野生動物管理を充実させ、森林伐採に頼らないバイオ燃料を村に普及する。	→			2007年
2001年11月	日本(長野)	長野黒姫アファンの森保全＊／財団法人C.W.ニコル・アファンの森財団	荒廃した土地をトラストし、ヤマメなど多様な生物が生息できる天然の森の回復を目指す。回復のための森林整備と自然環境評価のためのモニタリングを行い、順応的な活動を行う。	→			
2001年11月	日本(沖縄)	沖縄やんばる森林保全＊／やんばる森のトラスト	ヤンバルクイナなど絶滅の危機にある生物のすみかである、やんばるの森を残すことを目指す。森が国立公園に指定されるよう行政への働きかけを行い、地元への意識啓発を進める。	→			
2002年3月	ガーナ	熱帯雨林回復＊／コンサベーション・インターナショナル	日陰で育つかカオを利用した森林農法を地域に普及し、野性生物が住める森の回復を目指す。森林農法による農家の収入向上をはかると共に、動物の移動を利用した森の自然回復を行う。	→			
2004年5月	ロシア	北限のトラ生息域タイガ保全＊／FoE Japan	アムールトラなど野生動物と人とが共生するタイガの森を世界遺産に登録し残すことを目指す。国内法による保護地指定と世界遺産申請の働きかけを行政に行う。また、地元住民のレンジャー養成を行う。	→			
2007年8月	中国(雲南省)	三江併流世界遺産の生物多様性保全＊／アジア緑色文化国際交流促進会	持続可能な森林保全により地域が発展する世界自然遺産のモデル的管理事例を目指す。森林生態系の現状や新炭の利用を調査し、地元住民への意識啓発も行いながら持続的な森林管理を進める。	→			
2007年8月	ブラジル	大西洋岸低地熱帯林ポアノバにおける森林復元＊／ハードライフアジア	地域関係者の合意による持続的森林管理が行われ、周辺地域のモデル事例となることを目指す。薪消費による森林の減少調査や土地所有者に啓発を行い、持続的な森林管理を進める。	→			

* 「社会貢献積立金制度」の対象プロジェクト